

メトロポリタン美術館の至宝 世界のジュエリー展: 変容する身体

ジュエリーは世界最古の芸術形式で、洞窟に描かれた壁画よりも何万年も古い歴史があります。ジュエリーはいつの時代も、文化を問わず、人間の身体価値を強化、拡大するものとして、目立たせたり、高めたり、歪ませたり、変化させたりする役割を果たしてきました。今回の展示では、時空を超えてジュエリーの本質や身につけることの意味、そしてそれらが装飾する身体にどのように力を宿すのかを紐解きます。さらにその過程を通じて、人間特有の根源的な性質も探究します。

世界のジュエリーの歴史が紡いだ注目すべき物語の数々を紹介する本展では、ニューヨークのメトロポリタン美術館の所蔵品から、紀元前2000年から21世紀までの約4000年間にわたり五大陸で受け継がれてきた約200点の傑作を展示しています。5つのテーマ別セクションで構成され、古代文明から最先端の現代作品まで、ジュエリーの発展をたどる展示となっています。各セクションでは、装身具の持つ独特な側面を探っており、装身具を身に纏う人と、多様でありながら互いに関連しあうこれらの芸術作品を形作ってきた文化のありようについて、新たな視点が得られます。これらの作品群は、時代や文化を超えた比較を促すため、関連するグループごとにまとめて展示されています。

本展は、ニューヨークのメトロポリタン美術館と香港故宮文化博物館が共同で開催しています。その他の展示作品には、香港故宮文化博物館の夢蝶軒コレクション、香港故宮文化博物館のクリス・ホール・コレクション、イルミナータ・コレクションの所蔵品が含まれます。キャセイパシフィック航空とアメリカン・エクスプレスが本展の主要スポンサーを務めています。展示のグラフィックデザインにおけるアートディレクションは、陳幼堅(アラン・チャン)氏が手掛け、香港バレエ団からは公演映像の提供を受けています。

装飾された身体

ジュエリーは、常に身体との対話のなかに息づいています。最も身近な芸術として、身体の曲線に沿い、体を包み込むジュエリー。肌に直接触れることも多い存在で、身につける人を飾り、その姿を美しく引き立てます。髪飾りは頭部と顔の存在感を高め、ウェストに巻きつける大ぶりのベルトは上半身を際立たせます。さらに言えば、ジュエリーには、ごく些細な身体の動きを増幅させる効果もあります。ペンダントの付いたネックレスは、身につける人の呼吸に合わせて上下に揺れます。バングルは、肘の軽い曲げ伸ばしに合わせて、腕を上下にスライドします。イヤリングは頭を傾けるたびに揺れ、重厚な指輪は身振りによる表現にアクセントを加えます。このように身体は、ジュエリーに命を吹き込み、ジュエリーはその身体の動きを気高く昇華させます。

神聖なる身体：金の装飾品

太古の昔から、ジュエリーは神々を象徴するものであり、神性と結びつき、それを示す印でもありました。エジプト、アメリカ大陸、中国など、世界各地の遺跡から出土した古代のこうした品々は、神性を捉えて、呼び覚まし、体現するものとしてのジュエリーの類稀な力を伝えています。本展で展示されている装飾品の多くは、豪華な埋葬品としてそれらを着用した者と共に発見されたもので、来世へ旅立つために不可欠な装備の一部でした。例えば、煌めき、動きに合わせてゆらめく権力者の象徴を身にまとったカリマの黄金の人々は、間違いなく神聖な存在へと変容し、その肉体は輝く永遠の殻によって覆い隠されていました。これらの装飾品のすべては、神々の世界に入る上でジュエリーがいかに重要であったかを物語っています。

王者の身体：王の威厳を表すジュエリー

誰が王なのかは、一目でわかるようにしなければなりません。象徴的な素材、最高の職人技、そして君主の権力を強調する図柄を通じて、ジュエリーは常に、王権を維持するために不可欠な精緻な階級制度を強化する役割を果たしてきました。それは君主の身体を従者から、そして従者を一般大衆から区別するものでした。王族が用いた装飾品は模倣の対象にもなりました。ティアラのような形態が、民衆のファッションとして定着していったのはその一例です。金であれ宝石であれ、宮廷のジュエリーの原材料は特権という名の独占権を象徴していました。権力を持つ者だけが資源を掌握し、ジュエリーの崇高な輝きを手に入れ、それにより自らの地位を強固にしました。本セクションでは、歴史的にジュエリーがどのような方法で階級や地位を顕示するものとして用いられてきたのか、いくつかのテーマごとに紐解きます。

超越的な身体：ジュエリーと信仰

ジュエリーは、現実的な次元と同様に、精神的な次元においても自在に機能し、しばしばその両者の橋渡しも担いました。これは一見、矛盾しているように見えるかもしれませんが。なぜならその原材料は、陸や海から直接採掘される金属や鉱物といった、極めて現世に縛られた物質に他ならないからです。しかし、これらの素材の希少性と美しさは、その不滅性や、獲得に必要な膨大な人間の労力と相まって、それらを奇跡的な存在へと昇華させたのです。このセクションで展示される3組の作品は、精霊の召喚、神霊の鎮め、加護の祈祷といった、超越的な交信を可能にするジュエリーの力を称えています。

魅惑する身体：芸術としてのジュエリー

「魅力とは、実在する何かです。身に纏う何か.....香水や香りのように.....。それは記憶のようなもので.....深く伝わっていきます」

ダイアナ・ヴリーランド(1903～1989)、伝説的なファッションの権威であり、長年にわたる『ヴォーグ』の編集者

ジュエリーは、神秘性と官能性の魅力を、繊細かつ劇的な方法で定義し、再定義することができます。このセクションでは展示品を3つのグループに分けて、魅惑的な女性の身体を形作る上でジュエリーが果たす複雑な役割に焦点を当てます。銀製の婚礼用の装飾品から、きらめくダイヤモンドのブローチ、そして既存の価値観を覆すシュルレアリスムの装身具に至るまで、ここに展示されたジュエリーは、女性的な美と魅力の概念を時に肯定し、時に覆すものとなっています。

輝きをまとう身体：素材、技巧、革新がもたらす美

私たちがジュエリーを身につけるのは、根本的には、人に見られるためです。ジュエリーは光を捉え、視線を引きつけ、輝き、反射します。その最上の姿は、眩いばかりの輝きを放ちます。このセクションでは、ジュエリーの「美しい姿」に注目し、素材の価値、デザインの質、卓越した技、驚きや衝撃さえもたらす力について探求します。宝石で作られたものであれ、蜜蝋や藁で作られたものであれ、これらの品々は、私たちの見られたいという欲望や、誇示し、華やかに飾り立て、披露したいという欲求を掻き立てます。その表現が極限に達するとき、人々の視線は身体そのものよりもジュエリーへと注がれ、肉体は宝飾という技巧の美の祭典の背後へと退くことさえあります。